

ネイチャーセンター ガイド (112)

釣りに思うこと

ゴールデンウィーク中、横浜から毎年来ていただいている子どもたちと釣りへ出かけた。昨年もイワナ4匹という大収穫をあげていた。うち2匹は虫を採ろうと思って網を水に入れたら、獲れちゃいました。でも2匹はちゃんと釣ったんです。

姉、弟の2人兄妹。弟は昨年釣り上げ、自信満々の余裕な表情。姉は今年は釣れるかな？と不安な顔色。しかし、いざ出発すれば、そんな表情は一遍、さっそうと釣り場へ向かいました。

早速、熊よけの指笛を鳴らすと「いつものだね！」なんて言って返し、溪流釣りの一連の流れを思い出しながら、川虫獲り。今年は釣れるかな？という半信半疑な顔の父も同行し、一番夢中なのは、父と昨年釣り上げた弟。でっかいカワゲラの幼虫を探し、ポイントへ。

今日のポイントは父かな？なんて思いながら、いつの間にか父が釣り上げる。なんだかうれしそう。その感動を娘にと竿を渡す。私は弟と昨年釣り上げたポイントへ。うずうずしている弟が「最初からやりたいから、竿貸して」なんて、かわいいこと言ってくれる。

3分間放置。釣れない。「ここいないんじゃない」そこで私の出番。「どれどれ」同じポイントへ糸をたらすと3秒でくらくらついた。20cmオーバーのイワナを釣っちゃいました。正直「ふふっ」なんて・・・

2つ目のポイントは、狙って釣ったか？偶然釣れたか？を知れたこと。昨年は偶然釣れたかもしれないが、今年の調子で釣れば、釣れると



思ったんだろうな、きっと。だから釣れない。釣り堀りじゃないから。

水の流れや、魚のいそうなポイント、糸をたらす位置、糸の流し方なんかを考えてやらないと釣れない。弟はその辺を知っ



たのかな？でも、その魚を水面まであげて逃げられてるんです。経験、経験。こんな失敗が心の余裕をやがて生んでいくんですね。釣れているだけじゃ味わえない悔しさ。もう一度あの喜びを味わいたいがために彼は考えるだろう「どうすればもう一度釣れるのか？」それが自然と向き合えた瞬間だったのかもしれない。「こんな楽しい遊び場ないよ、横浜じゃ」とポツリともらした弟の言葉が妙に印象的でした。こうして4回目の出会いを終わりました。

「どうすればもう一度、釣れるのか？」と悔しさの中に考える力をつけてあげること。これが子どもたちに今一番必要だよね。体験だけを管理主義、合理主義で行ってはならない。様々な気持ちを芽生えさせ、芽に水をやり、肥料を与えながら、育てていかなければならない。「お金だけもらえればいい」「お金を払ってるんだから、何でもしてもらえる」そんなことは甘い。そんなサービスは自然体験にはいらない。山に教わることがいいのだ。だから何も無くていい。

何も無ければ考える。考えなければ知恵はつかないし、この物質があふれる世の中で考えなくていいのは当たり前。あえてそんな状況を作り出す技術を指導者は身に付けなくてはならないのだ。なぜなら、子どもたちは考える喜びを失っているから、いや、教わっていない、知らないから・・・

考えて、自分で試して、失敗して、感じて、体にしみ込ませることを、そしてまた新たに考えることを、その喜びを他者と分かち合うことを、子どもたちもよくは分からないけど、求めていますよ。そんな場所、何処にあるかって？日常生活に転がっています、たくさん。

連絡・問合せ先 ☎(45)6222

宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター
開館時間：午前9時から午後4時まで
休館日：月曜日、祝日の翌日